

ヨハネ福音書における十字架の意味： 時を手がかりとして

福 嶋 裕 子

序

ヨハネによる福音書はイエスの十字架を、罪びとの代わりにイエスが死ぬことで神に宥めの供物をささげたという意味に理解していない。贖罪の死という後代のキリスト教理解を福音書に読みこむことは、福音書本来のメッセージを曲げることになる。

ではヨハネによる福音書で、イエスの死はどのように理解されているのだろうか。結論から言えばイエスがこの世にきた目的は、信託者の共同体が、神とキリストを知ることによって永遠の命を与えられ、神の栄光が現れることである(17:1-26)。ヨハネによる福音書は、古代の人々が、政治的犯罪者への極刑である十字架に直面したときに提出したひとつの理解を示す。現代人にはどれほど奇妙に思えても、福音書をそのままに読むのであれば、十字架は神の栄光を現すというのがヨハネによる福音書の主張である。

1. 「時」を手がかりに

ヨハネによる福音書の最初から、「時」(ᾠρα)という単語を追うことで、イエスの十字架に至るまでの流れを分析する¹。基本的にギリシア語の「時」(ᾠρα)

1 (2:4; 4:21, 23; 5:25,28; 7:6,8,30; 8:20; 12:23,27; 13:1; 16:2,4,21,25,32; 17:1; 19:27) ただし、7章6, 8節だけ、ギリシア語はカイロスだが、ここでは考察の一つに入れた。

は時刻を示す言葉である。ヨハネによる福音書でも多くの場合は時刻を表すが、それ以外に、「私（イエス）の時」という特別な意味合いで使用されたり、将来の終末の時と現在の時が同時に語られたりする。ここでは十字架と何らかの形で関係すると思われる「時」を選んでみた。最初に翻訳を示し、考察を行う。

ヨハネ福音書で「私の時」という語句が最初に出てくるのはイエスが公に奇跡（しるし）を行われたカナの婚礼の場面である（2:4）。そこからイエスの「時」を指示する場面が折々に見られ、最後の祈りで「時が来た」とイエスは述べる（17:1）。この祈りの中で、イエスは神の栄光について明確に説明する。キリストが、信徒者に「永遠の命」を与えることによって神の栄光が現れる。その顛末で「時」という言葉は明示されないが、十字架上のイエスが「成し遂げられた」と述べることで、その「時」が成就したことが示される（19:30）。「時」という言葉で、順番に時系列的な説明がなされているわけではなく、物語の時間とイースター後の共同体の時間が重複することもあれば独立していることもある。そのため考察は散漫な印象を与えるが、最後に「過越祭の準備の日」にヨハネによる福音書がこだわることに注目し、本稿のイエスの死についての結論としたい。

2. イエスの時は十字架の時

イエスは彼女に言った。「私とあなたに何の関係があるのか。女よ。私の時はまだ来ていない。」（2章4節）（筆者訳）

2章4節でイエスは「自分の時が来ていない」とイエスの母に述べた。これは公に宣教を開始する時が来ていないため、奇跡を行うことはできないという意味ではない。イエスの時とは、十字架の死の時だと理解するほうが妥当である。イエスは自分の時が来ていないにも関わらず奇跡を起こしたからである²。

2 Mary L. Coloe, *John 1-10*, ed., Barbara Reid, Wisdom Commentary 44A, (Collegeville, Minnesota: Michael Glazier Book, 2021), 56.

ちなみにヨハネ福音書でのみ、イエスの母は十字架の場面に居合わせたことが明示される。他の福音書とは異なり、ヨハネ福音書におけるイエスの母は、福音書の最初と最後で貴重な役割を果たしているのだが、その解釈については分かれる（19:26,27）。

3. 「今」であり「将来」の時

彼女にイエスは言った。「私を信じなさい、女よ。時が来ているからである。この山でもエルサレムでもなく、父を礼拝する。」（4章21節）

「しかし時が来ている。それこそ今ここに。まことの礼拝者たちが霊と真実をもって神を礼拝するであろう。というのも、父がそのような礼拝者たちを探しておられるから。」（4章23節）

4章21, 23節、特に23節の「今ここに」は、物語における「今」と「将来」の時と一緒に指示されている。サマリアの女に今ここで、霊と真実をもって礼拝することの可能性を述べているのだが、イエスの死と復活を体験した後のヨハネ共同体に向かっても同じことが語りかけられている。この将来と現在が入り混じる「時」は、明確に「イエスの時」ではないが、イエスの十字架によって可能になったことが示唆されていると理解できる。

4. 終末の時に起きること（今という時）

「まことに、まことに私は言う。時が来ている。それこそ今ここに。死者たちが神の子の声を聞き、聞いた者たちが生きるであろう。」（5章25節）

5章24節で、永遠の命を現在におけるリアリティとしてイエスは説明する。「私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を持つ」と現在形である（5:24）。永遠の命を持つとは、地上での生活の後に天で与えられる無限の生ではなく、今、ここで、自身の存在の真実を生きることを意味する。したがって「死者」とは生物学的には生きていても、霊的に死んだ者を

意味する (5:25)。25節での「時が来ている。それこそ今ここに」とは、二重の時制を表現する。イエスがこれらの言葉を語ったその時であり、かつ、復活体験後のヨハネの共同体が福音書のこの言葉を聞く「今の時」でもある。³

5. 終末の時に起きること (将来の時)

「このことで驚くな。時が来ている。墓にいる皆がその声を聞くであろう。」(5章28節)

5章28節は、終末論的な最後の時、すなわち将来の「時」を指す。だがヨハネ福音書は伝統的な終末論のパターンの先を行っている。伝統的な終末論においては不正のうちに殺された者が、最後の審判において神と共にある至福の生を与えられる。そのような終末論では、最後の裁きにおいて死者の運命が覆され、生前に不正によって苦しんだ者は神と共に至福のうちに復活する。しかしヨハネ福音書において「永遠の命」を持つ者は、現在、地上において神と共に真実の生を生きている。ただし永遠の命を持つ者も、やがて死んで墓に入る。

だが将来の「ある時」に、墓に入った者すべてが復活へと呼び出される。ヨハネが理解する最後の審判において、生前に善い生き方をした者は、神に裁かれることなく、生前の真実な生き方をそのままに現すだけである。だが生前に悪を行った者は神に裁かれる (5:29)。

体が現実に死んだ後に終末における復活が起きることをヨハネは受け入れている。⁴ しかし地上でイエスの言葉を受け入れ、イエスの真実な生き方・^{いのち}命へと引き入れられたことで、終末はすでに始まったとヨハネでは理解される。そのイエスの^{いのち}命へと引き入れられるのが、十字架の時である。

3 Coloe, *John 1-10*, 149-150.

4 Coloe, *John 1-10*, 151.

6. イエスの時はまだである

かれらにイエスは言った。「私自身の時はまだである。だがあなたがたの時はつねに備わっている。」(7章6節)

「あなたがたは祭りに上って行きなさい。私はこの祭りには上って行かない。というのも、私の時が満ちていないからである。」(7章8節)

7章6節、8節でのイエスの「時」はギリシア語ではカイロス (καιρός) で、カイロスという単語が用いられるのはヨハネではこの場面だけである。6節の「私自身の時はまだである」は、2章4節のカナの婚礼においてイエスの母に語られたのと同等の表現である。その「時」に何が起きるかは明確には述べられていないが、イエスはエルサレムに行かないという含意から、エルサレムで起きるイエスの十字架の死、また復活と高挙によってイエスの真実が知れたと理解できる。

7. 「十字架の時」でなければ誰もイエスを捕らえることはできない

そこでかれらは、彼を探して、捕まえようとしたが、彼に手をかけることができなかった。彼の時がまだ来ていなかったからである。(7章30節)

これらの言葉を、神殿の宝物殿で、話し、教えておられたとき、誰も彼を捕まえることができなかった。彼の時がまだ来ていなかったからである。(8章20節)

7章30節と8章20節では、イエスの十字架の時はまだ将来であるために、人々はイエスを捕えることができないと説明される。

8. 十字架は、栄光の時である

そこでイエスはかれらに答えた。「人の子が栄光を受ける時が来た。」(12章23節)

「今、私の心は騒ぐ。何と言おうか。父よ、この時から私を救ってください。否。この理由で、この時に私は来た。」(12章27節)

12章23節では、異邦人(ギリシア人)がイエスに会いたいと言ってよこしたことを受けて、イエスは自分にとって決定的な「時が来た」ことを悟る。イエスが受ける栄光とは、イエスの死によって人々が「永遠の命」に入ることを意味する。イエスの十字架の死は、人の罪のあがないの概念によってではなく、一粒の麦が地に落ちて「死ぬ」ことで「多くの実を結ぶ」という豊穡な命の誕生を連想させる。⁵

いみじくもファリサイ派の人々が「この世界は彼の後に従った」と述べているように(12:19)、ギリシア人は「世界」を象徴する。当時のユダヤ的な世界観において、世界は悪の力の支配下にあると見なされた。ギリシア人たちが来たことを、天上で、神とこの世界の支配者である悪魔的な諸勢力の間の宇宙的な闘争が動き出したことの前兆だとイエスは理解したのであろう。それを示唆するのが、天からの神の声である(12:28)。イエスは「この世が裁かれる時」が来たと告げる(12:31)。伝統的なユダヤ教の終末論では、宇宙的な闘争は神の勝利に終わり、平和に満ちあふれる時代が始まると考えられた。そのようにイエスは、自分が「地から上げられるとき、すべての人を自分のもとに引き寄せよう」と言う(12:32)。「上げられる」とは十字架を指すが、イエスの十字架において、天で繰り上げられるのは宇宙的な闘争であり、最終的には神の勝利と栄光、さらにキリストの栄光が輝き出ることがすでに約束されている。まさにこの理由で、この栄光の時のために、イエスはこの世に来たのである(12:27)。⁶

9. 父のもとへ

過越祭の前に、イエスは、この世から父のもとへ移る自分の時が来たこと

⁵ Coloe, *John 1-10*, 345.

⁶ Mary L. Coloe, *John 11-21*, ed., Barbara Reid, *Wisdom Commentary 44B*, (Collegeville, Minnesota: Michael Glazier Book, 2021), 346.

を知り、この世にいる自分の者たちを最後まで愛された。(13章1節)

13章1節は、明確に「この世から父のもとへと移る」時として、イエスの「自分の時」が説明される。イエスの生涯の目的は、すでに3章16節で示された通りに、信じる者が永遠の命を生きることである。そこに神の愛が示されている。「最後まで愛された」のギリシア語表現「最後まで」(εἰς τέλος) は、イエスの死のときの言葉「成し遂げられた」(τετέλεσται) にかけていると理解できる。⁷

10. 復活の後に起きること(弟子たちがシナゴグから追い出される)

「かれらは、あなたがたをシナゴグから追い出すだろう。じつに、時が来る。あなたがたを殺す者が皆、神に礼拝をささげていると考えるだろう」。(16章2節)

「しかし私はこれらのことをあなたがたに語った。かれらの時が来たときに、私がかれらについて話したのだと思い出すためである」。(16章4節)

旧約聖書には神が、殺人を承認する場面がある。ピネハスが、モアブ人の女とイスラエル人の男を殺したこと(民25:1-13)、レビ人が、金の子牛の事件をきっかけに同胞でありながら敵対する者たちを殺したこと(出32:25-29)などである。フィロンによれば、レビ人による殺戮は、神への愛が、家族愛よりも優っていたことを示す好例とさえ評価される。申命記では、異教の神々に礼拝するように誘う預言者、夢占い、あるいは、たとえ実の兄弟、子ども、親友であっても殺すようにと命じられている(申13:2-12)。しかしヨハネによる福音書において、イエスや弟子たちを拒絶した者たちが殺されるべきだという主張はない(ヨハ6:66)。⁸ 神を礼拝するために人の命を奪うことは、ヨハネによる福音書では肯定されていない。宗教的な理由による殺人は、旧約聖書では是認される場面があるが、紀元70年以降のユダヤ教にも、またヨハネ福音書でも否

⁷ Coloe, *John 11-21*, 362.

⁸ Coloe, *John 11-21*, 440-441.

定されている。

11. 十字架の後に起きること（喜び）

女が子を産むとき、苦しみがある。彼女の時が来たからである。しかし子が産まれると苦痛を思い出さない。この世に一人の人が生まれた喜びのゆえに。(16章21節)

16章21節では、イエスの受難が、出産における苦しみの「時」にたとえられる。だが産みの苦しみは、子が産まれた後には喜びに変わる。喜びはイエスの復活をすでに先取りして予告するものだが、イースター後の共同体の十字架理解を伝えるものでもある。このたとえにおいて出産する母親をイエスに、生まれてくる子を「弟子たち」に理解するのが妥当である。だが最初から福音書を読んできた読者は、神がイエスをこの世へ (εἰς τὸν κόσμον) と産んだことも想起するであろう。ヨハネ福音書3章16節を、(母なる) 神が、産んだひとり子 (μονογενῆ) イエスをこの世に (τὸν κόσμον) と与えたと理解することもできるからである。⁹ イエスが妊婦のイメージにたとえられること、それどころか神が母親のイメージを包摂することは、ジェンダーの視点から興味深い。¹⁰ イエスの言葉を聞く直接の弟子たちに女たちが多くいたのではないかと推測され

9 Coloe, *John 1-10*, 101. バーバラ・ライトは、福音書の冒頭、「万物は言によって成った」の γίνομαι (1:3) を「万物は言によって産まれた」と翻訳することを提案する。また神が、神の子たちを産むというニュアンスが1章13節にあるように、ヨハネによる福音書は出産のイメージに満ちている。Barbara E. Reid, “Birth from the Side of Jesus (John 19:34),” in *Finding a Woman’s Place: Essay in Honor of Carolyn Osiek*, R. S. C. J., ed. David Balch and Jason T. Lamoreaux (Eugene, OR: Pickwick, 2011).

10 聖書の文化圏において、出産はもっぱら女たちの領域に属する。それは、血にまみれた厄介な現象だが、謎めいて、力強く、恐るべき瞬間で、いのちを与える神を直接に経験することにつながるのであろう。参照 Kathleen P. Rushton, “The Woman in Childbirth of John 16:21: A Feminist Reading in (Pro)creative Boundary Crossing,” in *Blood, Purity and Impurity: A Feminist Critique*, ed. Kristine de Troyer et al. (Harrisburg, PA: Trinity Press International, 2003), 77-96.

る。¹¹

12. 十字架の後に起きること、と受難予告

これらのことをたとえて、あなたがたに話して来た。もはや、あなたがたにたとえて話さない時が来るであろう。そうではなくて、率直に父について私は話すであろう。(16章25節)

見よ、時が来ている。じつに、やって来た。あなたがたは散らされて、それぞれ自分の所へ行ってしまう、私はひとりにされるであろう。しかし私はひとりではない。父が私と共におられる。(16章32節)

16章25節での「時」は、イースター後の弟子・共同体の経験を反映するのであろう。たとえによらずに、率直な言葉によって直接に神を知る時が弟子たちに訪れるとイエスは述べる。弟子たちは、その通りに今やイエスの言葉を理解すると答える。だが、弟子たちは受難と復活の全貌を未だ知っていない。イエスが独りきりにされる受難の「時」も予告されている(16:32)。時についての説明は、直線的に過去から未来へと進むのではなく、内的な連関の中で螺旋的だと言える。

13. 受難と栄光

これらのことを話してから、まなこを天に向かって上げて、言った。「父よ、時が来ました。あなたの子に栄光を現してください。子があなたに栄光を現すために。」(17章1節)

17章全体は、受難を前にしたイエスが神に祈った長い祈りの言葉である。イ

11 イエスが、弟子たちが泣き悲しみ(κλαύσετε)、この世界が喜ぶと述べているが(ヨハ16:20)、泣く「弟子」としては、これ以前にはベタニアのマリアがラザロの死に泣き(ヨハ11:33)、これ以降ではマグダラのマリアが墓の前で泣く(ヨハ20:11)。Coloe, *John 11-20* 449.

イエスという存在が、天地創造の前から神に愛され、栄光を与えられていることが祈りの土台にある（17:24）。それゆえイエスという存在を通して、神の愛が弟子たちの内に与えられることがイエスの生の目的である（17:26）。そのような神の愛をこの世界において実現させる「時」が来たとイエスは述べる。

福音書全体の流れからすれば、この「時」が受難を指しており、十字架へと物語が進んでいく指標の役割を「時」という単語は示している。しかしイエスの祈りの内実が実現し、それを経験しているのはイースター後の共同体である。物語においてイエスは弟子たちに囲まれて食卓についているが、その祈りは時空を超えた神の領域と交差している。16章45節でも、十字架によって実現する将来の時間が、物語の現在において実現したかのようにイエスは語る。¹²

祈りにおいてイエスは、神の領域とこの世の領域を自在に行き来するかのようである。たとえば「それで私はもはや世にいませんが、しかしかれらは世にいます。私はあなたのもとへと参ります」（17:11）。イエスがこの世にいないことによって、救いが実現するという逆説が示されている。救済は、神が人々（あるいは被造物）のうちに内在することによって成し遂げられる。¹³ しかしそのためにはイエスが神のもとから遣わす弁護者を、弟子たちが受け入れる必要がある（15:26）。

最後の祈りにおいて、イエスは三つのことを神に願う。神が、御名によって弟子たちを守ること（17:11）、弟子たちがこの世にあって悪の力から守られること（17:15）、弟子たちが真理によって聖とされること（17:19）である。第一の「御名」とは「神」という言葉を用いずに、神の臨在を表現する。イエスは弟子たちが神のうちにあることを祈っている。¹⁴

第二の願いは、弟子たちがこの世の悪の力から守られることである。福音書において「この世」は、一貫した意味を与えられていないように見える。神は

12 イエスが天を見上げて語り出すのは、天を覗きこむ（εἰς τὸν οὐρανόν）に等しいと理解できる。Coloe, *John 11-21*, 460.

13 17章2節の「すべての人」（πάσης σαρκός）は、「すべての被造物」とも理解できる。

14 Coloe, *John 11-21*, 463.

この「世を愛された」(3:16)とも述べられるが、その「世」はイエスや弟子たちと対立する。これは世が、この世の支配者によって悪の影響下にあるが、将来のある時（終末の時）に支配者たちが打ち負かされると確信して、現在の悪の勢力を避けることができるようにという祈りであり、紀元後一世紀のユダヤ教に見られる祈りでもある。¹⁵

第三の願いは、弟子たちが聖とされることである。イエス自身が、神によって「聖とされて」(ἁγιασεν)、この世に遣わされた(ヨハ10:36)。神の栄光がイエスのうちに宿るので(ヨハ1:14)、イエスは自分の体を神殿と呼ぶことができる(ヨハ2:21)。この神殿は、「父の家」であり、弟子たちの新しい「父の家」でもある(ヨハ14:2)。神のもとに戻るに際して、イエスは弟子たちの体が新しい「父の家」(神殿)として聖とされるように願った。¹⁶

17章での祈りから、イエスを祭司として、また同時に犠牲の供物として解釈できるという主張がある。しかし神殿での祭儀における宥めの供物という概念はヨハネによる福音書にはなじまない。イエスが神殿の境内から商売人や両替人を追い出したとき、イスラエルの礼拝における犠牲のシステムを転覆することをイエスは目指した。イエスの神殿での行動は祭儀的な宗教制度を浄化し強化するためではない。伝統的な神殿理解を否定し、神と人との新しい関係を打ち立てることに眼目がある。真の礼拝とは霊と真実をもって為されるべきで、聖なる場所や神殿が礼拝を支えるのではない(ヨハ4:23)。¹⁷

加えて、17章でイエスは弟子たちのために執りなしの祈りをささげているが、執りなしの祈りは預言者を始め王や一般の信徒に特徴的であって、祭司の特権的な任務には属さない。¹⁸ イエスは勝利者であって、犠牲の供物ではない(ヨハ16:33)。

¹⁵ Coloe, *John 11-21*, 464-465.

¹⁶ Coloe, *John 11-21*, 465.

¹⁷ Coloe, *John 11-21*, 467.

¹⁸ Coloe, *John 11-21*, 466.

14. 受難と時の成就（18-19 章）

それから弟子に言った。「見よ、あなたの母だ。」その時から弟子は、彼女を自分のところに引き取った。（19章27節）

「父よ、時が来ました。あなたの子に栄光を現してください。子があなたに栄光を現すために」（ヨハ17:1）。この言葉が、続く18章と19章での受難の意味を解く鍵だとすると、イエスの十字架は神の栄光を現すという意味になる。受難物語には福音書で描かれて来た主題のすべてが集積され、成就の時を迎える。中でも信託者が神の子となることは、福音書の冒頭での約束である（ヨハ1:12）。その観点からイエスの十字架を捉えるとき、ヨハネによる福音書だけが、イエスの母と愛する弟子にイエスが語りかける場面を描くことは注目すべきことである。

イエスの母が、「愛する弟子」の母となることで、イエスと弟子たちの関係は一変する。弟子たちは、イエスの母を通して今やイエスと兄弟・姉妹の関係に入る。そのことにより弟子たちも神の子となり（1:12）、イエスが神との間に保持していた永遠の命という関係性に引き入れられたのである。ヨハネ福音書1章11節で「かれ[言]は自分のところに（εἰς τὰ ἴδια）来た」とあるように、19章27節での「自分のところに」という語句の繰り返しにより、1章での神の子となる約束の成就が示されている。¹⁹

たった一つの語句の繰り返しを捉えて福音書のクライマックスを同定するのはいささか弱いのではないかと反論もできるであろう。だが、ヨハネによる福音書の繊細な表現の一つ一つを見ていくと、イエスの「時」の成就是、十字架のもとでのイエスの母と弟子への語りかけとそれに続くイエスの死の場面にあると言える。

十字架上のイエスが、母と弟子とに語りかける前後に三回、「聖書の言葉が実現した」と述べられている（19:24; 28; 36）。²⁰ 最初のできごとは、イエスの

19 Coloe, *John 11-21*, 490.

20 ただし、24節と36節はπληρωθῇで、28節はτελειωθῇである。

下着が一枚織りであったため、衣をめぐって兵士たちがくじで引いたことである（参照：詩22:19）。一枚織の衣は、イエスが象徴的に祭司の役割を担っていた、あるいは、教会の統一性を示唆すると解釈される。しかし、イエスの十字架の死において聖書の言葉の成就が繰り返し強調されているのも事実である。²¹

イエスはすべてが「成し遂げられた」（τετέλεσται）ことを理解して、「渴く」と言われた（参照：詩22:16）。これが19章における二番目の聖書の言葉の実現である。このときイエスは、ヒソプの棒の先にワインビネガーを含ませた海綿を口に受けて「成し遂げられた」（τετέλεσται）と言って、息を引き取られた（19:30）。ヨハネによる福音書を通して、イエスは神が今も働いておられ（5:17）、イエスは神のはたらきを「成し遂げる」（τέλω）ために遣わされたという（4:34; 5:36; 17:4）。ワインビネガーを口にした後「成し遂げられた」は、聖書の言葉の実現であり成就としての自分の死を引き受けられた。ギリシア語では、イエスは「頭を傾けて、霊を渡された」とも読める（19:30）。そうすると、十字架の下に集められたほんのわずかの弟子たちに聖霊を渡されたと理解できる。イエスの霊を受けることで弟子たちが新しく生まれた者になったのである。²² ヨハネによる福音書は歴史的な事実として起きたことを述べるのではなく、十字架の死によって引き起こされた宗教的な意味を象徴的に説明する。

イエスの十字架の死によって信徒者がイエスの命を受け、神との内的な関係性を成立させたとするコロエの象徴的な解釈を支持できる点が二つあると私は考える。どちらも決定的とは言えないのだが、第一に、イエスの母と愛する弟子の匿名性である。ヨハネによる福音書だけが、イエスの母の名前を明示しない。しかもイエスは、決定的な二つの場面において自分の母親をつねに「女

21 Coloe, *John 11-21*, 488-89.

22 後に、20章21-23節で聖霊を弟子たち与えられたのは、弟子たちを宣教へと遣わすことが目的となっている。19章30節から20章に至るまで、イエスの時の成就是続いている。Coloe, *John 11-21*, 491-92.

よ」と呼ぶ (2:4; 19:26)。²³ イエスの母の人物としての固有性よりもヨハネによる福音書ではイエスの「母」という立場が強調されている。さらに「愛する弟子」については、二世紀のリヨンのエイレナイオス以来、「愛する弟子」はヨハネと伝統的に同定されるが、福音書において「愛する弟子」の名前は明示されない。19章26節の「愛する弟子」を直訳すると「十字架のそばにいた弟子、[その者をイエスが] 愛した」である。その構文からして、後の編集者による加筆の可能性を疑うことができる。²⁴ 十字架のそばにいたイエスの母と弟子は、どちらもイースター後のヨハネ共同体のメンバーとして「弟子」という立場を代表すると理解できる。²⁵ 弟子たちの絆を結ぶのは、イエスが十字架上で語りかけた言葉にあるとヨハネ共同体は理解したのではなからうか。

第二に、復活のイエスがマグダラのマリアに現れたとき、イエスはマグダラのマリアに「私の兄弟・姉妹たち」に伝言を伝えるようにと命じた (20:17)。だがヨハネによる福音書で、ここに至るまで、弟子たちがイエスの「兄弟・姉妹」と呼ばれたことは皆無なのである。どこから弟子たちが、イエスの兄弟・姉妹という関係性に入ったのかを説明するのに、コローの解釈は適切なのである。

15. なぜ受難が栄光なのか：過越の小羊の死

ヨハネによる福音書において、イエスが過越の小羊を象徴して屠られたと描かれるが、この表現は贖罪死を示唆しない。旧約聖書において、清めのいけに

23 他に「女よ」と呼ばれたのは、サマリアの女とマグダラのマリアだけである (ヨハ 4:21; 20:15)。この不可解な呼び方について納得のいく説明は見出せないが、どの人物もヨハネ共同体の中で指導的な立場にあったと推測される。エリザベス・シュスラ・フィオレンツァ、山口里子訳『彼女を記念して』(日本キリスト教団出版局: 1990)。

24 「愛する弟子」の語句は、明らかに編集である21章20節と同じである。ちなみに、福音書には匿名の「もう一人の弟子」が登場する (18:15,16; 20:3,4,8)。その「もう一人の弟子」を「愛する弟子」と同定するのが、13章23節、20章2節である。

25 コローは、「もう一人の弟子」と「愛する弟子」とさらに、洗礼者ヨハネの二人の弟子のひとり (1:35) を同一人物と見なしている。Coloe, *John 1-10*, lvi.

えとしてささげられるのは雄牛、雄山羊、雌山羊、それに雌羊である（レビ4:1-31）。また神殿では朝夕に雄の小羊がイスラエルの清めのために、あるいは「神への宥めのために」ささげられた（民28:2-6）。あるいは小羊という言葉が、イザヤ書53章での「主の僕」の無実の苦しみと死による罪の代償性を連想させるかもしれない。しかしヨハネによる福音書で、イエスが小羊にたとえられるとき、それは「過越の小羊」である。²⁶

ヨハネ福音書が強調するのは過越の時に、イエスが死なれたことである。ユダヤ人の指導者たちは、儀礼的な汚れによって過越の食事ができなくなることを恐れて総督官邸に足を踏み入れない（ヨハ18:28）。過越祭には犯罪人を釈放することが慣例になっている（ヨハ18:39）。ピラトがイエスを十字架につけるために人々に引き渡したのは「過越祭の準備の日の正午ごろ」だが（ヨハ19:14）、それは過越の小羊を神殿で屠り始める時刻である。イエスが十字架を背負ってゴルゴタまで歩いたことはイサクが薪を背負って歩いたことを連想させるが、一世紀のユダヤ教では、イサクの犠牲は過越祭と関連づけられていた。イエスはヒソブの棒でワインを口にしたが（ヨハ19:29）、エジプト脱出の夜にヒソブの束で羊の血を戸口につけた（出12:22）。イエスが十字架につけられたのは過越祭の準備の日で、翌日が安息日であるため、イエスの足を折って十字架から取り降ろすようにユダヤ人たちは要請したが、イエスはすでに死んでいたので足は折られなかった（19:31）。これは、過越の羊の足は折ってはないという掟に付合する（出12:46）。²⁷ ヨハネ共同体が、イエスを過越の羊と理解したのは確かである。イエスの死は、象徴的な次元においてエジプト脱出以来の約束を完成させるものである。

出エジプトにおいて、過越の羊の血は何を意味したのであろうか。それは神による厄災の過越である。過越のいけにえとして屠られた羊の血が戸口につけられ、神は「その血を見て、あなたがたのいる所を過ぎ越す。こうしてエジプトの地を私が打つとき、滅ぼす者の災いは及ばない」のである（出12:13）。過

²⁶ Coloe, *John 1-10*, 37-38.

²⁷ Coloe, *John 11-20*, 499-500.

越の羊の血は、個々人の罪を滅ぼすためのものではなく、神的なレベルでの厄災から逃れるためのものである。²⁸

洗礼者ヨハネが初めてイエスに出会ったとき、イエスを指して「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と述べた（ヨハ1:19）。ここでの罪とは、個々人が犯す罪ではなく、この世の悪の諸勢力が持つ宇宙的なレベルでの罪である。この世は、神が創造した世界として愛に満ちあふれる場なのだが、同時に神の意図に反する諸勢力によって悪に支配されている。神の意図に反することが罪だが、人が罪を犯すとき、その人は「罪の奴隷」となる（ヨハ8:34）。人はこの世において罪の支配下になす術もなく奴隷となっているが、その罪を取り除くためには、贖罪や赦し以上のものを必要とするとヨハネによる福音書は理解する。それは神の裁きであり、イエスとこの世の諸勢力の支配者たちとの間の宇宙的なレベルでの激しい闘争である。その結果、イエスは勝利したと宣言する（ヨハ12:31; 16:11, 33）。²⁹

ヨハネによる福音書が提示する救済は、この世の罪からの解放である。神の小羊が成し遂げたのは、罪の奴隷状態からの解放であり、神の子として真実に生きることへの招きである。「だから、もし子があなたがたを自由にすれば、あなたがたは本当に自由になる」（ヨハ8:36）。

²⁸ Coloe, *John 11-21*, 500.

²⁹ Coloe, *John 11-21*, 501.